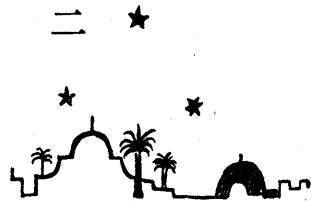


幼児の四季

夏

上 沢 謙

二



春は「解放」の時といったが、夏は「開放」の時である。春、長い蟄息から解放された自然は発展して、夏になると「あけっぱなし」になる。胸をひらいて人に近づく。山は招く、海は呼ぶ。

自然はまったく人間のお友だちになる。

花も、高くはるかにかかるのではない。すぐ目の前に咲き出すのである。爛漫として、馥郁として、ただ眺めて嘆賞し、嗅いて堪能するのではない。近づいてさわりもするし、取ってあそびもする。朝顔、百合、チューリップ、鳳仙花、松葉牡丹など。

木もつくねんと立っているのではない。だまって並んでいるのではない。葉をしげらせて、そよ風にひるがえりつつ、さらさらと、ざわざわと音を立てる。それは数千数万の緑の小人が、一斉にうたいながらおどるのである。こんな可憐な、しずかな、そしてにぎやかなダンスパーティがほかにあるだろうか。じっと見てみると、なんだかじぶんの手足も、いっしょにうごきだしたくなる。

動物も、猛々しい声で吼えかけない。おそろしい牙や爪をふるってとびかからない。目の前に、足もとに、なにげなくあらわれる。蛙にせよ、螢にせよ、蟹にせよ、バッタにせよ、みな無邪気なしかもユーモラスな存在で

ある。幼児にとって恰好な相手にならざるを得ない。なんと彼らがこれをよろこぶか。不気味な蛇さえも、こわがりながら、そばへ寄って見るではないか。

「めしあがれ」 「ありがとう」

出されたお椀は木の葉っぱである。もられた御飯ごはんは、水ひき草の実を取った粒々である。お皿はふきの葉である。載せられたおかずは、赤い、白い、緑の、いろいろな花や草のきざんだのである。

「はい、おこうこ」 出されたのは、草の茎を切ってそろえたのである。

夏だからこそ、こういうおままごとができるのである。

「はだかではだし」は、肉体の自由潤達の極致であろう。アダムとイヴがそうであった。

しかも、自由潤達な幼児でさえ、一年のうち、はだかではだしで、思うままにあそべる日が幾日あるだろう。さりとせせつこましい世の中である。

そうだ。今、このゆったりとした草原で、このひろびろとした砂浜で、はだかではだしであそばせてやろう。そのあそんでいる有様をごらんさない。実に自由潤達そのものである。なんの制限も、障碍も、圧迫もない。だから、いささかの気がねも、遠慮も、躊躇もない。とぶ、走る、ころがる、ひっくりかえる。呼ぶ、叫ぶ、笑う、ふざける。思うことを、思うままに、思う通りに実行し、実現し、実施する。

「自発活動」という。「自発活動は幼児教育の根本だ」という。しかし日常生活においては、よしんば教育施設の中においても、直接間接の時間的制限、空間的抵触に遇って、なかなかいいところの「自発活動」はおこなわれにくい。

ところが、ここにこそ、そういう制限抵触を超えた純粋な自発活動の世界が展開されるのではないか。

そうして疲れる。

ごろりと、草の上に、砂の上に仰向けになる。思うままに手を伸ばし、足を伸ばす。

見上げると——はるかな天とじぶんの間をさえぎる何物もない。太陽は赫々と照り、白雲は悠々とうごく。見えるものはそれだけだ。じっと見てみると、じぶんの魂もいつかどこから抜け出して、からだが軽くなったような気がする。すうっと、大空のほうへ、身ぐるみもちあがっていくような気がする。

これは自然に合一した状態といえよう。この世にありながらこの世ならぬ状態である。

こういう時の幼児のようすをごらん下さい。しずかに見つめる目、ゆるやかに結んだ唇、紅を潮した頬、ゆっくり伸びた手と足——おそらくこういう心持になっているにちがいない。

こういう心持には、けっしていつでもどこでもなれるものではない。まことに尊とい経験といわねばならない。

汗は暑さにつきものである。殊に活動してやまぬ幼児にはつきものである。「子どもは風の子」という。しかし「汗の子」でもあらねばならぬ。

われをさえ忘れてあそんでいるのだもの。汗など忘れるのはあたりまえだ。額はびっしょり、背中がぐっしょり。それでも平気。平気というよりは気がつかない。気がつかないから、ふこうともしない。いや、ふえてやろうとすると、逃げるようにかけていってしまう。だから、そばへ寄ると、においがぶんぶん。

けれども、それでいいのだ。それでなければならぬのだ。もし、汗を出さない子ども、汗を出せない子どもがあるとしたら、それこそ心配だ。普通の子どもでないから、なにか特別な原因がなければならぬからである。だから、夏の保育は汗の保育ともいえよう。汗を避けては夏の保育はできない。いわんや汗をおそれたり、いやがったりして、それができるはずはない。

先生も汗だらだらにならねばならぬ。「ならねばならぬ」ではない。いっしょになってあそんでいれば、自然に汗まみれになる。けれども自然だから気がつかない。

「金ちゃん、まあ、汗！ さあ、ふいてあげましょう」　　そういうと、金ちゃんがいいかえした。

「先生だって、いっぱい汗が出ているよ。ふいてあげようか」

両方、顔を見合せて、思わずにっこりと笑った。

そんなに暑い中にも涼しさがある。否、暑いから涼しさがあるのである。

ふと、はいった木かげ——ひやりとする。肌にはいる風——ひやりとする。手を入れた泉——ひやりとする。足に踏んだ黒土——ひやりとする。そうしてほっとする。「ひやり」の味。これこそは、春にも、秋にも、冬にも得られない、まさに「夏の味わい」である。

ここに休息があり、回復があり、レクリエーションがある。自然は烈暑酷熱と共に、これを用意してくれる。無言にして親切であり、無為にして周到である。

こういうものに囲まれる夏である。

子どもをして存分にそれに接しさせ、じゅうぶんにその中にはいりこませよう。そうして、自然の心に、自然に、心から、融け入らせよう。

自然に関する指導、科学に対する教育の重要なことはいくまでもない。しかし上述のような交渉からは、「指導」とか「教育」とかいわれる以上のものもたらされるのではなからうか。それは自然と子どもがいっしょになることである。共に生活することである。深い意味で、お友だちになることである。更にいえば自然と子どもと一体になることである。

然り、特にこの夏において。特にこの幼児にとって。